

寄稿

吉賀高校アントレプレナーシップ教育の歴史

島根県立吉賀高等学校教育魅力化コーディネーター 坂田紀之

1 吉賀高校の中でのアントレプレナーシップ教育とは
どのようなものか

アントレプレナーとは？

独創的なアイデアと技術で新しい事業を起こす起業家を意味する。

アントレプレナーシップとは？

その起業家の精神のことで、吉賀高校における「アントレプレナーシップ教育」とは「起業家精神に学ぶ」ことを基本に置く。

生徒は実際に「起業」することも含め「独創的なアイデアと技術」で「無」から「有」を生み出す精神を獲得させることを目指す。

吉賀高校でのアントレプレナーシップ教育のテーマは？

ベースは「吉賀町」です。生徒が吉賀町をフィールドとして吉賀町内各地に足を運んで吉賀町の人と接し、吉賀町にある「ひと」「もの」「こと」に直接触れることや、コミュニケーションを通して吉賀町の課題を発見し、あるいはアドバンテージを発見することで、生徒のアイデアをもってその解決策や活用方法を考え出していくこと。

吉賀高校でアントレプレナーシップ教育を行う意義は？

吉賀町では「サクラマスプロジェクト」という吉賀町オリジナルのふるさと教育が町内「保育所・小学校・中学校」さらには地

域の公民館を中心に展開されている。このプロジェクトによって生徒はフルサトのことを肌で感じ、歴史や知識として吉賀町への愛着を深め、地域の一員としての自覚をもつようになる。

高校ではその発展として「アントレ教育」の中で、地域の課題を自分自身が能動的にかかわる「自己の課題」として取り組むように転換しプロジェクトを考案、実施していく。

2 吉賀高校アントレプレナーシップ教育の歴史

地域の古老に話を聞きに行く「聞き書き」が始まりだった。

二〇〇二年から始まった「共存の森ネットワーク」の主催する「森の聞き書き甲子園」の手法を基に、ワザビを作る人、助産師さん、炭焼きや林業などに関わる古老の一言一言に歴史を感じ、何気なく出てきた言葉にその人の生き様や、人生などを聞き取る時間であった。

「ICレコーダー」を準備し、録音されたものをすべて書き出す作業となったが、すべてを書き出すことは難しいこと、また、取材する生徒のほうにも話を引き出す力が求められ、個人個人の力量に差の出る始まりであった。

以下、吉賀高校の中でのアントレプレナーシップ教育を年表にした。

平成二四年度（二〇二二年）：サクラマス・ドリームプログラム（SDP）の始まり

サクラマス・ドリーム・プログラム（SDP）の発案。

一年生が聞き書き、二年生が吉賀町で何ができるか考える（ア

ントレプレナーシップ教育）、三年生が進路も視野に入れ、吉賀町で自分に何ができるか考える。この一連の活動を「サクラマス・ドリーム・プログラム」と名付けた。

一年生：吉賀町について知る（聞き書き）前年に続き地域や古老に取材に行く際「ICレコーダー」を準備し、録音されたものをすべて書き出す作業となった。その取材の中から「心に残った言葉」をキーワードに取り組んだ。

この年度の反省として、録音されたものを「書き出す」ことが主な活動となり、キーワードを発表することで終わってしまい、その後の考察や発展には至らなかった。

二年生：この年から「アントレプレナーシップ教育」という名前の下で取り組みが始まった。一年生の「聞き書き」の次の段階となるもので「吉賀町で何ができるのか？」を考えるものとして位置付けられた。

二月四日（水）「吉賀町活性化プラン発表会」を開催した。取材に関わった人や行政の方々に前にも、自分たちの考えたビジネスプランのプレゼンを行った。

チームコウヤマキの企画した「吉賀町で大きくなる夏休体験から受験対策まで、よしかの自然に全部お任せ」は幼児から小学生を対象とした受験対策や自然体験を、夏休みの自由研究まで含めたツアーであった。このプランは日本政策金融公庫主催の「高校生ビジネスグランプリ」のベスト一〇〇に選ばれた（応募総数一五四六件）



平成二五年度（二〇一三年）：「聞き書き」の発展・高校生
ビジネスグランプリへの参加

一年生：ICレコーダーによる録音の書き起こしだけでは生徒の
考察につながらないことなどの反省を踏まえて「聞き書き」を
見直し、再スタートを切った。

地域の古老に限らず農業関係・文化関係・地域の商店など
にも取材先が広がった。しかし、取材先が生徒の「知り合い」や、
「知っているところ」などに限られたため、吉賀町内の新しい
人や物の発掘などの広がりには繋がらなかった。

成果としては、町外からの生徒によって吉賀町内に限らず
「津和野町」まで取材範囲が広がったこと。また、生徒全員で
巨大な鹿足郡の地図「吉賀町聞き書きマップ」を作成し、自
分たちの取材先などの「マーク」や「アイコン」を作成した。
聞き書きだけでなく地域も考えることで生徒全員が関わるこ
とができ、活動自体が「見える化」された一年であった。

二年生：八月に六チームに分かれて町内の六企業へ職業体験を行っ
た。九月には職業体験報告会を開催した。

その後七チームに分かれて吉賀町活性化プランを考察した。

平成二六年度（二〇一四年）：青山学院大学との高大交流の始まり
一年生：この年も古老などの「聞き書き」にとらわれず、生徒自身（グ
ループで）が取材してみたい「人」や「もの」を選び、主体
的に取材交渉を行い、聞き書き成果としてそれぞれの取材し

たものをパンフレットにして町内に配布した。

一〇月：東京研修の中で青山学院大学において生徒が吉賀町について初めてプレゼンを行った。プレゼンの前には大学生によるキャンパスツアー（大学生のキャンパス生活紹介）を行い、高校生にとっては普段見ることのない場所を案内してもらった。また、ワークショップ形式でお互いの地元での生活紹介を行った。

二年生：一二月四日二年生によるビジネスプラン発表会

平成二十七年二月六日（金）松江市島根県立産業交流会館（くまびきメッセ）問題解決型成果発表会に参加。吉賀町活性化ビジネスプラン「高速道路から ゆらら に続く道を作ろう」のメンバーが参加した。

二年生全員が日本政策金融公庫主催の「高校生ビジネスگرانプリ」に応募

平成二十七年（二〇一五年）：SDP（サクラマス・ドリームプロジェクト）の整理の一年

一年生：高校のクラス分けの中で「グリーンコース」が設定された時期でもあることから「環境」や「高津川」に関心をもつことになった。また次年度に「全国高校生環境サミット」が開催されることも決定し、それも含めてテーマを「高津川」に絞り八チームに分かれて以下の課題について聞き取りを行った。

河川工事が川に及ぼす影響

蛭とアユの関係性

高津川と有機農業の関係性

森林が及ぼす高津川への影響

高津川の生態系

家庭排水の現状から探る高津川

高津川の良さを生かした魅力の発信

高津川のアユの生態と状況

地域への取材や関係機関への取材を積極的に行うようになってきた時期であった。アンケートに限らず、地域の家庭や事業所を生徒が実際に訪問し、一〇〇件の聞き込みアンケートを行ったグループもあった。

一〇月：東京研修において青山学院大学の学生の前で、聞き書きで取り組んでいるテーマをそれぞれに発表し、その後のグループワークでアドバイスをいただいた。

青学食堂にてスペースを取っていたら、学生と一緒に昼食を摂ることで都会の大学生との距離が一気に近づいたように感じた一年であった。

二年生：七チームが吉賀町の活性化プランを考察した。年度当初から「高校生ビジネスگرانプリ」への全員のエントリーを目標にしていたため、プランだけではなく「お金」や「具体的な人」などがより具体的にプランに織り込まれなくてはならず、「夢のある企画」よりも「現実的なプラン」が多かった。

平成二八年度（二〇一六年）：キャリア教育とアントレ教育の融合の協議が始まり

一年生：「三〇年前から学び三〇年後につなげる」をテーマに考察や取材をし、テーマを掘り下げていった。

一〇月：東京研修、青山学院大学の学生の前で「聞き書き」で取り組んでいるテーマについてグループごとに発表した。また、八月に開催された「全国高校生環境サミット」で全国から集まった生徒と関わった生徒が「思ったこと」「感じたこと」「やり遂げたこと」について報告を行った。

二年生：七チームが全体的に「吉賀町の活性化」と「人を呼び込む」ことについて考察をした年であった。このプランのなかの「吉高ライスバーガーを売り込め」という企画を具体化し、レシピや商品を実際にショッピングセンターキヌヤへ持ち込み商品化にこぎつけた。吉賀高校のアントレの中で現実に販売される商品になるという大きな一歩となった。またこの商品は一月と二月で行われたキヌヤ「吉賀町フェア」において大好評を得、ヒット商品となった。

また、この年にプラン化された「カレンダー」は翌年の後輩に引き継がれ、吉賀町のカレンダーとして商品化された。先輩から後輩へのプランの引継ぎが初めて具体化された事例であった。

平成二九年度（二〇一七年）：高大交流の発展・聞き書きとアントレの統合と整理の時期

これまで一年生は「聞き書き」二年生は「アントレ」とすみ分けして取り組んでいたものを二九年度から「アントレプレナーシップ教育」に統合し、一・二年生の連続性を持たせた二年間での「アントレプレナーシップ教育」に取り組むという形で新しいスタートを切った。一年時の初めから吉賀町の課題を考え、ただ案を考えるだけにとどまらず実際に二年掛かって具体的な形に到着することを目標にした。

一年生：吉賀町魅力化・活性化プランをテーマに九チームで活動した。

この年から八月に吉賀町で青山学院大学をはじめとする大学生との交流が始まり、八月の時点で大学生と一年生が顔を合わせ、現在取り組んでいるテーマを示すことで東京研修の折に都会での共通な課題を見ることができた。吉賀町から見る都市部だけではなく逆の視点からの考察を行うことができるようになった。

取材を続け、吉賀町の現状を見の中で、町内にある小さな商店から「後継者問題」まで考察が広がったことが大きな気づきであった。

一〇月：東京研修、青山学院大学の学生が生徒の取り組んでいるテーマに沿った東京での取材先へアポをとり、半日をかけて地域巡検に連れて行ってくれた。夏の交流があったおかげで高校生と大学生の距離はいつそう近くなり、高校生の抱えている課題についての理解もあることで積極的な意見交換やアドバイスも生まれ、大学生にとっても高校生にとっても東京（都立）や吉賀町がより身近な存在となった。

二年生：具体的に吉賀町への貢献ができるものとして高校生が実際に聞かれるものや商品化できる具体的な提案が集まった年代であった。昨年のライスバーガーなどが実際に商品化されたこともあり、生徒の中にも「思いをもって動くことでプランが現実になる」実感も生まれてきたようである。このチームの中からカレンダープロジェクトを展開し、町内の名所とバス停を組み合わせたカレンダーを作り上げ商品化を行った。

また、これまでの発表形式を変え、ポスター形式によるプレゼンテーションとなった。これにより生徒が全員でプランに関わり、聞いてくださる方との距離も近く地域のみなさんの意見をより身近に聞くことができるようになった。

※この年から翌年にわたり吉賀町まちづくりアドバイザーの千田良仁先生（伊勢皇学館大学）にアントレに関わって頂いた。

平成三〇年度（二〇一八年）：高大交流の発展と全国高校生SBP交流フェアへの参加

・高校生の課題として長年指摘を受けていた「人前で話すこと」「自分の思いを伝えること」の苦手さを克服するために、人前で発表する機会を増やし、生徒全員が参加するためにポスター形式の発表に改めた。結果として人前での発表を苦にする生徒がいなくなったことは収穫であった。

・吉賀町役場高校支援室を中心にアントレに関する「探究課題候補」や「人材リソース・バンク」を募集し生徒の探究活動に活用させていくことになった。

・総合的な学習の目標を「こうなつてほしい未来」を「自ら創る力」を育成することに定め、その力を育成するために大小さまざまな課題を探究する活動を授業の核とすることとした。
・アントレの授業で取り組んできた問題解決を「マイプロジェクト」として継続して取り組む生徒が現れ始め、県内他校の生徒と連絡を取りながら、お互いに刺激を受け、向上する姿が見られた。

・二月に高校近くの林業総合センターで開催していた「キャリア教育成果発表会」を吉賀町の中心にある「吉賀町民体育館」に移動することでアントレに関わる様々な方が参加できた。

・ポスター形式で発表することで生徒が当日に発表する回数が増やし（合計八回の発表）たくさん参加者に聞いていただく機会ができた。また発表者との距離が近いこともあり質疑応答なども大いに盛り上がった発表会となった。

一年生：主題を「まちづくり」として「吉賀町は非常に住みやすい町である」という仮説からまちづくりに不可欠な「農業」「商業」「漁業」「医療」「行政」の観点から吉賀町の取り組みや課題を調査することから始まった。調査する結果としてよりよいまちづくりのためには「何を」「どのように」改善していけばよいかを考察して行くことをテーマとした。

八月：青山学院大学・法政大学の学生に高校生が取り組んでいる課題を示し、探究の方法やプレゼンの仕方について大学生からアドバイスを貰った。

午後からは実際に町内に出て探索し、高校生の抱えている課題や吉賀町の現状を共有するフィールドワークを行った。

昨年に続き二回目の吉賀町を経験する大学生もいて、より吉賀町をお互いに理解する中で大学生との距離が一段と深まった年であった。また、吉賀町役場や地域の方々が積極的に関わっていただくようになり、高校だけではなく大学生が吉賀町に来ることで得られる効果や町民の変化を「町」として感じはじめ、改めて大学生を歓迎する基盤ができたような大きな変化の見られた年であった。

一〇月：前年の東京研修の発展として「課題に沿ったフィールドワーク」を目指して青山学院・法政大学の学生と一日かけて地域巡検を行った。

吉賀町に深くかかわってくれた大学生が、高校生のもつ疑問や課題に沿った都会と田舎の比較が具体的にできるような訪問先を設定してもらった。

最終的に青山学院大学に集合し、高校生と大学生でグループワークを行い「田舎と都会の違い」や「フィールドワークで感じたもの・得たもの」というテーマで発表を行った。

二年生：前年からの課題を引き続き深めていく学年となった。しかし、課題は掘り下げたもののそれを解決するにはどうしたらいいかという「具体的な解決方法」にたどり着かなかったグループが多かった。

その中でも「よしかみらいの活性化」に取り組んだグループや「水源会館」の課題に取り組んだチームはイベントを行ったり、ポスターを作成したりと実際に形に残したチームも現

れてきた。

伊勢 S.B.D.への参加：Social Business Project の略で高校生が主体となって地域の社会的課題に対して企画・販売・発信することで高校生の学びの機会を作る大会に中国地方から一チーム参加した。吉賀町にある障がい者福祉施設よしかの里と協働して販売した「なかよしプリン」をテーマに発表し「皇學館大學賞」を受賞した。

三年生：アントレⅢの実現

進路の決まった三年生がライスバーガーの新作「モチフワライスバーガー」を試作し「キヌヤ本部」においてプレゼン・試食会を行い商品化となった。

三年生が自分の意志で課題を見つけ、授業ではないところで「自分の思い描く夢」を実現した最初の例となった。

平成三二年・令和元年度（二〇一九年）：高大交流の発展と

吉賀町との連携の充実期

・吉賀高校に地域の方を呼び高校生と密に話し合う機会を設けることで、生徒が町民の語る吉賀町への思いを直に感じる機会が増えた。

・大学生交流は吉賀高校のアントレ教育の中でも主軸となる活動となってきた。

・アントレの授業で取り組んできた問題解決を「マイプロジェクト」として継続して取り組む生徒が増え、「発表すること」「人に伝えること」で自分たちの思いをさらに深めて自走してい

くという理想的な探究の発展が見られた年代であった。

青山学院大学から島根県へ①：高大交流の中から「島根県の教育」に興味を持った青山学院大学の学生が島根県の教員試験を受験し、島根県西部の教員として採用された。高大交流から生まれた成果であった。

一年生：アントレの開始時期を早め、アントレに関する理解を深めるために授業自体に様々な教員が関わられるような体制を構築していった。

生徒には「アントレは未来を創る力をつけるための授業」と位置づけし、小さなことでもいいので自分にできること、自分にしかできないことを見つけ解決していくことを目的にした。

早い時期から伴走する教員を配置することで夏休みにかけて自分で活動するグループが増えてきた。

八月：早い時期から大学生と交流することができ、大学生が吉賀町を訪問する時期には高校生の関わっている課題を大学生が把握していて、その課題に沿った視点で吉賀町の探索ができるようになってきた。

吉賀町教育委員会が積極的に関わっていただくようになり、夏の授業外での交流では大学生と高校生が自然に話し合いを深め、協働して関わりを深めるような場を企画していただくことで大学生との距離が一気に近づくことができた。

一〇月：東京研修では大学生が高校生の問題意識に沿った「都会で



の共通する訪問先」を企画していただくことで、高校生は田舎と都会を自分の目で比較することができた。東京研修から帰ってからの吉賀町でのその後の考察や探求に大いに役に立つ交流が企画された。

二年生：グループワークが充実した年代であった。自分たちにあつた課題を設定することで、楽しみながら課題解決に向かつて行動するという充実した活動が展開されていた。

人に自分の意見を「伝える」ことが楽しいと感じるようになってきた生徒が増えてきて、発表会も嫌なイベントではなく、どうしたら自分たちの気持ちを観客に伝えられるかという議論をグループ内で行い、様々なアイデアを凝らしたポスター発表が展開された。生徒たちが楽しんだ年であった。

令和二年度（二〇二〇年）：高大交流の発展と全国高校生SBP

交流フェアへの参加

一年生：高大交流をオンラインで開催

コロナウイルス蔓延に伴い例年開催されていた高大交流事業は大きく変わった。オンラインで情報交換やアドバイスをいただくという新しい形が確立され、吉賀町の魅力や自分たちが取り組んでいる課題などをオンラインで伝えるという新しい課題に取り組んだ。

当初はzoomなどの機器を使いこなすのに戸惑っていたが機会を重ねることに慣れていき、自分の思っていることを「伝える」技術は向上していった。

二年生：個別の活動の充実

取り組んでいる課題ごとのグループに「担当教員」がつくことにより、個別の活動は充実して進んだ。地域に出かける活動にも学校として「公欠」扱いで地域での活動が認められるようになったことが大きな進歩であった。

昨年からの課題を引き継いで取り組むチームが多く、時間をかけて充実した課題への取り組みが多くみられるようになった学年であった。

青山学院大学から島根県へ②：高大交流の中から「島根県の社会教育」に興味を持った青山学院大学の学生が、地域づくり・人づくりに関わりたいと島根県益田市のコミュニティリーダーとして赴任した。昨年に続き高大交流事業から生まれた成果であった。

三年生：伊勢SBPへ二回目の参加

二年生の時からプロジェクトに取り組んでいた「それゆけ！コッペパン」チームがオンラインで開催された伊勢SBP (Social Business Project) フェアに参加した。五月の書類審査で全国一三校に選ばれ、八月に開催された「オーラルセッション&実践発表会」で最終プレゼン六チームに選出された。

八月二三日に開催された最終チャレンジアワードで文部科学大臣賞に次ぐ「審査員特別賞」を受賞した。二年次から時間をかけて自分の課題ととらえて進路実現にまでつなげるという吉賀高校ならではの先例となった。

3 おわりに：アントレプレナーシップ教育から得てきた力と現状、そしてこれから

a 始まりのころの状況とそこから見えてきた課題

- ・地域の魅力が語れない。
- ・小さいころから地域に浸れていない。
- ・地域のアドバンテージである自然を経験していない。
- ・地域の宝である「人」と関わることが少ない。
- ・人と関わるのが苦手。
- ・地域の課題を考える機会がなかった。
- ・自分の意見を自分の言葉として「語る」ことが苦手。
- ・地域を見ることとして外に出ていく機会が少ない。
- ・中学校まで「ふるさと学習」や「職業体験」をしていながらそれが高校の「アントレ」につながるものではなかった。

b 解決方法として取り組んだこと

- ・高校で「地域クラブ」を結成し地域に出かける機会を増やした。
- ・一時期アンケートを地域に配り地域の方の意見や思いを集めることを主体にした時期もあった（できるだけ地域に生徒を出し、地域の人と話すことをめざしたため）。
- ・取材のアポ取りなども生徒が行うことにし「自分で考える」機会を増やした。
- ・生徒ひとり一人に「名刺」を作り社会に出るときのマナー

も併せて指導した。

・地域の方ができるだけ学校に来ていただくように発表会などに案内をし、生徒と語る機会を増やした（高校の敷居を下げる機会を多くもった）。

- ・高校生の取り組みを地域に発信できる機会を増やした。
- ・ひとり一人が地域の課題について考える機会を設けた。
- ・発表の形式を「パワーポイント」からあえて「ポスターでの発表」に切り替え生徒全員が何度も発表する形式にした。
- ・一枚のポスターを全員が書き上げることでテーマを「自分事」と捉えられるようにした。
- ・生徒の思いを引き出す「伴走者」の育成の必要性を感じた。
- ・単年度のテーマにせず、高校生活を通して取り組む課題を見つけられるようにした。
- ・大きな課題ではなく身近なテーマを見つけられるようにした。

c 生徒の変化と得た力

- ・自分の言葉で「伝える」技術は向上した。
- ・アポ取りや取材などを自分たちで計画し「動く」ことに抵抗感がなくなった。
- ・「なんとなく」ではあるが「アントレって何？」について自分なりに語るできるようになった。
- ・高校生が「自分たち」のために動いてきたことから「小学生」「地域の人」などと「ど」のように関わってもらえるのかや「どう協力してもらうか」などの作戦を考えるようになった。

・単年度の発表をゴールとせず息の長い取り組みをしていく生徒が現れた。

・高校生が地域の課題や解決法など「自分にできること」を模索しながら「実際に動く姿」を中学生の前で「語る姿」を見せる機会が増えた。

・人前で何度も話すことで自分の中で「思い」が確立されていき、なぜ動いてきたのかの「確信」に変っていく過程が見られた。

・中学校の生徒の発表会に高校生が出向き、アドバイスや意見などを伝える機会も増えた。

d 町の変化

・教育委員会が積極的に関わってくれようになり、中学校との連携がスムーズになった。

・町内小中学校校長会に高校も参加できるようになり、高校生の現在の取り組みなどを共有できる機会もできた。(サクラマプロジェクトの中で一貫性が見えてきた)

・高校生の発表に中学校の教員も参加してくれるようになり、高校生の動きを伝える機会が増えてきた。

・高校がポスター発表に積極的に取り組んだのと同時期に中学校も同じようにポスターでの発表に積極的に取り組んでいた。

・東京の大学生が吉賀町や吉賀高校と交流することで「島根県(吉賀高校)の教育」や「田舎での暮らし」に興味を持ち、実際に島根県に住むことになった事例ができた。都会からI

ターンする若者に向けて定住の流れも生まれてきた。

e 私が思っているこれから

・生徒の「質問する力」を育成していきたい。

・地域の伴走者、教員としての「伴走する技量」を育成する必要性。

・授業にとらわれずに自分事として動く力を引き出す技量の育成。

・生徒の「思い」を引き出していく大人の育成(少し重複…)。

・まだまだ地域にとって高校生は「お客様」……これを「対等に壁打ち」できる地域の大人になってもraitたい。

・生徒の発想がまだ限定的。もっと飛躍した(はじけた)発想を引き出す力を身につけたい。

・息の長い取り組みをしてほしい。

・マイプロなどで他の高校生徒との交流の必要性。

・全国の先進的に取り組んでいる高校生を実際に見る機会の必要性。

・新しい形だけでなく「生徒に合った歩み方」もある。生徒に合わせた歩み方も必要。

編集者注…本稿は坂田紀之コーディネーターがプロジェクト会で報告した資料を、本人にお願いして加筆修正いただいたものである。坂田コーディネーターは、第一九代 齋藤雅典校長が着任した二〇一三年度から吉賀高校のコーディネーターをなさっている。出身は吉賀町であり、吉賀高校の卒業生である。吉賀高校卒業後は関西の大学に進学し、吉賀町に隣接する益田市にJターンした。その後、吉賀町にUターンして一七年間にわたって保育園長として勤務、そのあと五五歳の時に吉賀高校のコーディネーターとなった。以上の経歴から分かるように、坂田コーディネーターは「地域内よそ者」（町外での経験があり、町外とのネットワークを持ち、しかも町内の事情や町民をよく知っている）である。また、保育園長時代の教え子が吉賀高校の生徒となっているので高校生との距離が近いという存在でもある。